

関西学院大学 研究成果報告

2019年3月28日

関西学院 院長殿

所属：教育学部
職名：教授
氏名：山本伸也

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：オランダ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	古ゲルマン語の動詞の比較研究
研究実施場所	アムステルダム大学文学部
研究期間	2018年8月27日～2019年3月6日（6ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

古ゲルマン語の動詞の比較研究

1. 研究の目的

本研究課題は、紀元後約2世紀から7世紀までの期間にゲルマン人によって用いられた古ゲルマン語（Old Germanic Languages）の動詞の比較研究である。ゲルマン語の動詞の法（mood）は、直接法（indicative mood）、接続法（subjunctive mood）、そして命令法（imperative mood）の3つの法に分類される。ゲルマン語のまとまった資料としては、4世紀にギリシア語から翻訳されたゴート語（Gothic）の聖書があるが、本研究は古ルーン文字碑文（older runic inscriptions）における動詞の希求法（optative mood）と命令法の出現状況、およびそれぞれの動詞の構成法を考察した。接続法は元来インド・ヨーロッパ祖語の希求法に基づいており、この考察ではルーン文字碑文に現れる動詞の意味内容〈希求・願望〉をより明確に表すために、あえて希求法としている。

2. 古ルーン文字碑文に現れる希求法と命令法の分布

古ルーン文字碑文に現れる希求法と命令法の使用と分布に関しては、ルーン文字碑文のデータベースであるRunenprojekt KielおよびRunes:Forshungsprojekt der Akademie

der Wissenschaften zu Göttingenにもとづいてまとめた。その結果、希求法の可能性のある動詞は26例、命令法の可能性のある動詞は19例であったが、希求法と命令法のどちらに属するかの判断が難しい語もあり、上記の数字は重複しているものも含まれる。すなわち、3人称・単数・現在・希求法 (3rd singular present optative) であるか、それとも2人称・単数・現在・命令法 (2nd singular present imperative) であるかの判断が容易ではない場合である。

希求法および命令法の可能性のある動詞を含むルーン碑文全てを個々に検証した結果、文字が確実に読み取れる碑文は、上記のWetzstein von Strøm (Norway)であった。また、Noleby stone (Sweden) は、文字および記された記号は読み取れるものの、解釈できない文字あるいは記号を有している。以下においては、Wetzstein von Strømの碑文に現れる3つの動詞について考察したい。

3-1. Wetzstein von Strømの概要

この碑文は1908年ノルウェーのヒトラ (Hitra) 島で埋葬品として発見された砥石 (Wetzstein; whetstone) である。長さ14.5cm、幅1.9cm、厚さ1.2-1.3cmで、幅の狭い両側に碑文が記されている。文字の特徴としては *ha* のバインドルーン (合字のルーン) が4回、*na* のバインドルーンが1回使用されており、その用法をもとに年代を推測すると600年頃とするのが妥当であろう (MacLeod 2002: 40, 79)。また、*k* を表す文字は400年から700年にかけてスカンジナビアで使用されていたので、この点においても600年頃という年代測定には妥当性があると思われる。

3-2. 碑文の解釈

Wetzstein von Strømのルーン文字碑文の主たる解釈は以下の通りである。

𐀀𐀁𐀂𐀃𐀄𐀅𐀆𐀇𐀈𐀉𐀊𐀋𐀌𐀍𐀎𐀏𐀐𐀑
𐀒𐀓𐀔𐀕𐀖𐀗𐀘𐀙𐀚𐀛𐀜𐀝𐀞𐀟𐀠𐀡𐀢𐀣 (Looijenga 2003: 357)

(1) Krause (1971: 166)

A: **wate hali hino horna;**

B: **haha skapi, haþu ligi**

‘Es netze diesen Stein das Horn! Schädige das Grummet! Es liege die Mahd!’

(2) Antonsen (2002:155)

Side A: **wate hali hino horna**

Side B: **haha skapi haþu ligi**

‘Whet this stone, horn! Scathe, …! Lie, …’ (haha must denote something that can scathe or do harm, while haþu must be something that can lie.)

上記の解釈にあるように、この碑文に現れる3つの動詞 *wate* - *skapi* - *ligi* に関しては、主として2つの異なった解釈がなされている。Krauseはこれらの動詞はすべて3人称・単数・現在・希求法と解釈するのに対して、Antonsenはこれらを3つの動詞を2人称・単数・現在・命令法とみなしている。ゲルマン祖語の3人称・単数・現在・希求法の人称語尾は **-ai(ǫ)* であり、2人称・単数・現在・命令法の人称語尾は **-(e)* である (Fulk 2018: 279, 282)。

3-3. wateの構成

Krauseは *wate* を古形 **wätijē* (3人称・単数・現在・希求法) に相当するものとみなし、その不定詞はOld Norse *væta* 「ぬらす」が示しているとする。Old Norse *væta* のゲルマン祖語はPGmc **wētijan* と推定され、*-ē-> -ā-* の音韻変化を経て、**wätijan* が成立したと考えられる。PGmc **wētijan* は形容詞 **wētaþ* 「ぬれた」から派生した弱変化動詞

(クラス1)で、*wēt-に接辞 *-ij- を付加して構成される。したがって、*wātijēは *wātijan「濡らす」の3人称・単数・現在・希求法となり、これをまとめると以下のようになる。

PGmc *wētijan ‘to wet’ w. v. 1 > *wētij-ai(ǫ) 3. sg. pres. subj. > *wātij-ē
> *wātē

この説明で問題となるのが、*-ij-ē > -ē の音変化である。Krause (1970: 166)の説明では、*-ij-が脱落することによって語尾が-ēとなるが、Antonsen (2002:158)はルーン文字碑文ではこのような音変化を示す証拠はないと主張する。他方、Syrett (1994: 241-2)によると、wateの -eは は語尾*-ij-ēを反映しているとしている。*-ij-の脱落による説明よりも、Syrettの自然な音変化にもとづく説明が妥当であると思われる。

Antonsen (2002:158-9)はwātēを希求法ではなく、2人称・単数・現在・命令法と結論付けている。すなわち、形容詞や名詞は他の弱変化動詞に転換 (Conversion) されることが可能であり、wātēは弱変化動詞クラス1ではなく、弱変化動詞クラス3の命令法であるとする。音変化は以下のように示されるAntonsen (1975:54)。

wāt-ē, 2d. sg. imp. , wk verb III; PG */wǣt-ǣ/

しかし、Ringe (2006: 258)によると弱変化動詞(クラス3)の作為動詞 (factitive verb) はゴート語の下位クラスのみに見れるとする。従って、wate は3人称・単数・現在・希求法と解釈するのが妥当であると思われる。

3-4. skapiとligiの構成

Rombouts (2017: 125) はskapiとligiのゲルマン祖語の不定形を以下のように再建している。

Class VI

PIE	Pr. -Gmc.	
*skh ₁ t ^h - i _ǵ ē	*skapjan-	hurt, harm

Class V

PIE	Pr. -Gmc.	
*leg ^h - (i)ē	*legjan-	lie

これら2語の再建形を前提に、3人称・単数・現在・希求法と2人称・単数・現在・命令法を構成すると以下のようになる。

(1) skapi

① 3人称・単数・現在・希求法

*skapj-ai(ǫ) > *skapj-ai > *skapj-ē > *skapjē > *skapi / *skapī

② 2人称・単数・現在・命令法

*skapj-(e) > *skapj > *skapi

(2) ligi

① 3人称・単数・現在・希求法

*legj-ai(ǫ) > *legj-ai > *ligj-ē > *ligjē > *ligi

② 2人称・単数・現在・命令法

*legj-(e) > *ligj > *ligi or *liggi

3人称・単数・現在・希求法の*-j-ai(ǫ) > *-j-ai > *-j-ē > *-jē > *-i / -ī の音変化の説明は困難である。他方、2人称・単数・現在・命令法の*-j-(e) > *-j > *i の

音変化のプロセスは自然である。

4. 結論と今後の課題

wateは3人称・単数・現在・希求法、**skapi** と **ligi**はそれぞれ2人称・単数・現在・命令法と解釈するのが妥当との結論に達した。しかし、この碑文全体の意味内容を明らかにするためには、更に**haha**と**hapu**の意味を考察する必要がある。

主要参考文献

Antonse, Elmer. 1975. *A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

_____. 2002. *Runes and Germanic Linguistics*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Fulk, R. D. 2018. *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*.

Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Krause, Wolfgang. 1966. *Die Runeninschriften im älteren Futhark. I. Text & II Tafeln*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

_____. 1971. *Die Sprache der urnordischen Runeninschriften*.

Heidelberg: Carl Winter.

Looijenga, Tineke. 2003. *Texts & Contexts on the Oldest Runic Inscriptions*. Leiden: Brill.

MacLeod, Mindy. 2002. *Bind-Runes. An Investigation of Literatures in Runic Epigraphy*. Uppsala: Institutionen för nordiska språk Uppsala Universitet.

Odenstedt, Bengt. 1990. *On the Origin and Early History of the Runic Script*.

Uppsala: Almqvist International Stockholm.

Ringe, Don. 2006. *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford: Oxford University Press.

Rombouts, S. 2017 The Proto-Germanic irregular weak verbs of class I' *NOWELE*. vol. 70 (2).

Spurkland, Terje. 2005. *Norwegian Runes and Runic Inscriptions*. Woodbridge: The Boydell Press.

Syrett, Martin. 1994. *The Unaccented Vowels of Proto-Norse*. Odense University Press.

他

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。